

音楽を通じて語る 生きること、働くこと、人とのつながり

入日 茜*・村上 克介**

昨年の講演内容をこのように公刊誌に掲載いただき、誠に光栄に存じますと共に、いささか恐縮いたしております。

大学時代に学んだ授業に触発され、私はシンガー・ソングライターを志しました。録音スタジオオーナーとの出会いを経て、オーディションに応募し、お誘いをいただきました。こだわりのある熱意を持ったプロダクションの所属となり、尊敬できる共演者たち、頼もしいスタッフ、温かいファンの方々に囲まれながら、華々しくはなくとも幸せな音楽人生を過ごして来ました。

時には失敗や挫折も経験しながらの作詞、作曲、CD制作、ライブ演奏、この約十年間を経て、オリジナリティは人生の中でとても大切なものであり、しかも、それは、個々人の感性によって作られることに気が付きました。感性は、芸術鑑賞、恋愛や読書、旅などによっても磨かれますが、人とのつながりによる影響がとても大きいものです。

本稿を読んで下さる皆様が、より良い感性を育まれ、生活においても仕事においても、より創造的な人生を歩まれるのなら、私にとってこんなうれしいことはありません。

キーワード : 講演、シンガー・ソングライター、オリジナリティ、出会い、人間関係

1. はじめに

大学において教養、専門教育以外に何を学生に伝えるか、試行錯誤をされている先生方も多いだろう。その一つの形態として講演会が位置づけられる。三重大学(以下本学)においては昭和48年より学外の学者、作家、スポーツ選手、社会活動家などを招き「共通教育特別講演会」が催されてきた。その数52回を数える。

各界の秀でた方々が過去の講演リストにあり、先達のご苦心が読み取れる。「特別講演会」となると人生に長けた先生の招聘を考えたくなるが、そのような先生の場合にはどうしても専門性が高くなり、学部学生からは遠い世界に見えてしまうことも考慮しなければならない。近未来を学生に考えさせるにはどうすればよいか。まずは講演会の講師は若手で、しかも努力途上であり、ストーリー性、また、意外性もあわせ持つ必要がある。そして、自らの将来の基礎となる20~30歳代でなすべきキャリア形成の大切さを伝える。これは、40歳代に入るまでには自らの方向性を確定させて欲しいという切なる願いの裏返しでもある。

ここで、かねてから縁故のあり、ドラマチックなオ

リジナル詞曲を多く持つシンガー・ソングライター入日に講演を打診した。入日はインディーズながらCD7作品をものにしており、平成17年度のステージ数は90回を越えるなど経験6年、ライブハウス中心の独自の音楽活動をして来た。スピーチと音楽を連動させての訴求を効果的と考えたことにもよる。

幸い平成18年度の講演課題として全学公募の中から採択を受けることができ、過日講演会を開催した。

新しい試みの講演会としてここに紹介申し上げるので、ご一読いただければ幸いである。なお、「♪」はピアノ弾き語りによるライブ演奏を示す。

2. 講演内容

♪「大人になったら」(CD未発表、¹⁾内に掲載)
大人になったら たくさんはたらいて
お金もちになったら 空に家をたてよう
大人になったら ぼくがサンタになって
パパとママにこっそりと プレゼントあげよう
今 ぼくらは 夜の上に立って
見果てぬ空に どんな夢をみるの

大人になったら きれいな服を着て
わたしだけの王子さまと 末永く暮らすの
大人になったら いろんな旅をして
世界中のともだちと いっしょに唄おう

* シンガー・ソングライター

** 三重大学大学院生物資源学研究所

(問合せ先) murakami@bio.mie-u.ac.jp

小さい頃は見えていた 幸せの青い鳥
だけど 姿は変わっても ずっと傍にいる
今 ぼくらは 夜の上に立って
見果てぬ空に どんな夢をみるの (繰り返し)
見果てぬ空に どんな夢をみるの

三重大大学の皆様、はじめまして、入日茜と申します。
今回、皆様の前で話をさせていただく機会をいただきましたが、村上先生から講演のご依頼をいただいたときは、とても不思議で仕方がありませんでした。

「商業的に成功しているとはいえ私のような者が、学生の皆さんの前で一体何を話せるというのか。」

しかも、先生は、思い切り理科系の専門でいらっしゃる。ますます、なぜ? という疑問が沸いてきました。そんな思いを、正直に、先生にお伝えしたところ、こんな言葉が返ってきました。

「あなたのライブに行った時、CDを聴いた時、そしてホームページに書いてあるエピソードや、ファンの方々の書き込みを読んだ時、あなたは今、とても輝いて見えました。」

音楽という夢を追いかけの中で、きっと、色々な出会いがあったと思います。それが今のあなたを作り、あなたを支えているのではないですか?

仕事を通じて、人とつながること、そして、夢をあたりにしていくことは、誰にとっても大切なテーマです。これから社会に出て行く学生たちに、音楽という夢を追い続けているあなたの経験を、あなたの言葉で、伝えてあげて欲しい…。」

…そうです。過大評価です。こんな風に思ったださる方がいらっしゃるとは…。しかも、大学教授。余計にプレッシャーをかけられているような気がしましたが、東京に出て丸6年という歳月が経った今、改めて、今自分がいる環境や、音楽という仕事について、考えてみるきっかけをいただきました。

他人と比べてしまうと、どうしても、自分にはないものや、劣っていることを発見して、落ち込むこともあります。しかし、私がここまで生きてきた中で、出会った人たち、ひとりひとりの顔を思い出していくうちに、こう思いました。

「今、自分の周りにいてくれる仲間たちや、ファンの方たちに支えられて、私は存在しているんだ。」

そう思った時、とても勇気が湧いてきました。そして、村上先生とのこの出会いも、きっと自分の人生へのかけがえのないプレゼントになると感じ、引き受ける決心をしました。

今、「あなたは幸せですか。」と訊かれたなら、私は「はい。」と答えます。

それは学生時代には感じられなかった気持ちです。

今はまだ、夢を見つけていない人も、もうすでに追いかけている人も、「本当の人生はこれから始まるんだよ。」ということ、そして、「大人になるって、とても面白いよ。」ということ、私の話の中に感じていただけたら、嬉しいです。講演するのは初めてということで、至らない点もあるかと思いますが、「生きること、働くこと、人とのつながり」をテーマに、語ってまいりたいと思います。どうか最後まで、入日茜の音楽人生と、私の曲たちにお付き合い下さい。

私は歌を聴いた人から、よく、「独特な世界観ですね。」とか「声に特徴がありますね。」と言われます。曲を自分で作っているので、もちろん、人の真似になってはいけないと思うし、オリジナルなものを作りたいと、いつも思っています。では、オリジナルなもの、オリジナリティって何なのでしょう。

皆さんの周りにも、ちょっと変わっている人、こだわり派な人がいるかと思っています。こういった人より目立つ人が、イコール、オリジナリティを持った人、ということなのでしょう。もともと一人ひとり顔も違えば、体型も違うし、育った環境も違う、それぞれが別の人間です。

どんな人でも、何かを個性というフィルターを通して表現したもの、それはすでにオリジナルなものだと私はいつも思っています。そうは言っても、自分は至って平凡だ、何の個性もない普通の人間だと思う人もいます。そういう人は、どうやって自分の個性を見つけ、オリジナリティを創っていけばよいのか。それにはひとつ、誰にでも見つけられる方法があります。

それは、「コンプレックス」です。自分の弱点、苦手なこと、嫌いな部分、実はそういったものが、良くも悪くも、個性につながっているのです。例えば、私の場合は、この声、張りがなくふわふわしていて、バンドのようなたくさんの音の中でだと埋もれてしまう、弱々しいこの声。人から、「明るい曲でも暗く聴こえる。」と言われたりもします。力強くて通りの良い声に憧れたりしますが、この声をいいと言ってくれる人がいるのです。それを入日茜の独特な世界観と評価してくれたりもします。また、他のアーティストの作品にコーラスで参加させていただいた時に、自分の声が曲の中に加わることで、柔らかい印象を与えたり、ボーカルの声を包み込む効果があったりする、専門的には倍音が多いということなのだそうですが、そんな自分

の声の意外な面に気づかせてもらいました。そのことが、自分の自信にもつながったし、この声が自分の個性だと、今では思えるようになりました。

自分ではコンプレックスだと思っていることでも、誰かが認めてくれることで、弱点は、個性になり得る。コンプレックスも含めて、それが自分なのだと、皆さん自信を持ってほしいと思います。そして、オリジナリティを創るのは特別な才能ではなく、何かを見て、自分はどう感じ、どう表現するのかという、その人の「感性」そのものだということを、忘れないでほしいと思います。

ここで、私の大学時代の話をしたと思います。

古都、奈良、私の学んだ奈良教育大学。奈良公園や東大寺などが近くにあり、とてものんびりとした環境の良い所でした。私は教師になりたかったわけではなく、おぼろげに将来、音楽の仕事をしたと思っていました。ドラマや映画のサウンドトラックを手がける作曲家に憧れていましたが、入学してからも特に何か行動に移すわけでもなく、何をやればよいかも解らず、時間だけが経っていきました。

そして、必修の単位としてとったある授業が、私の将来の夢を決めるきっかけとなるのです。これが、福井一先生にご指導いただいた「ミュージカル」という授業でした。とてもユニークな授業で、脚本から舞台道具、照明、音響、音楽、キャスト、すべて学生が主体となって作るという大掛かりなものでした。私は迷わず音楽のグループに入って、作曲、編曲をしていきました。といっても、何もかもが初めてなので、譜面の書き方からコードのつけ方など、所属していた研究室の石崎一夫先生や、院生の鈴木健司先輩に作曲、編曲の基礎をご指導いただきながら作業を進めていきました。すごく楽しくて、授業という枠を超えて、毎日遅くまで作業をしていました。おかげで、他の授業にはあまり顔を出していなかったのですが、良い子は真似しないで下さいね。

そうして、3回生になって自分たちの学年がミュージカルを引っ張って行くという立場になり、より内容に深く関わりながら曲作りをすることができ、また、この授業にのめり込んでいきました。ところが、舞台が完成し、自分の作った歌を役者の人が歌うのを聞いたときに、なぜか違和感を覚えたのです。曲を作っているときにイメージしていたものと、微妙にズレがあった。このときに、自分のイメージを形にするには、自分で歌ってみるのもアリなのかな、という選択肢が初めて出てきました。これがきっかけとなり、自分で歌

う為の歌を少しずつ書いていくようになります。ミュージカルの授業で作った曲のひとつが、今は形を変えて「羽」というタイトルで、CD²⁾に入っています。

そして、もうひとつ、大学時代に私にとって大きな出会いがありました。それがアルバイト先でのことでした。奈良駅近くの地ビール屋さんでウェイトレスをしていました。そこのコックの倉橋俊朗さんが、私が音楽をやっているのを知っていて、ある日一枚のチラシを持ってきてくれました。確か、フリーペーパーで、「記念にCDを作りませんか。」というような募集が載っていて、応募してみればと彼が勧めてくれました。無料でレコーディングができるということで、これは!と思い、家に帰って早速希望の葉書を出しました。それからしばらくして連絡が来て、運よくレコーディングをしてもらえることになりました。

奈良市の隣町、大和郡山市にあるNMGスタジオ、行って見てとても本格的なスタジオでびっくりしました。オーナーの朝倉進さんは自分で作詞作曲をする人が来るとは予想していなかったらしく、私を見て面白い奴が来たぞと思ったらしいです。

それまでは、ワンルームの小さな部屋でひとりで作っては満足していただけだったのですが、初めて自分の歌を人に聴いてもらうということで、緊張しっぱなしのレコーディングでした。最初にピアノを録って、そこに歌をのせて、できあがったものを大音量で聴いたときは、夢を見ているようでした。

朝倉さんは、「おまえ、なかなかいい曲書くやないか。」と、思いがけず褒めて下さって、「暇やったら遊びにおいで。」と言っただき、それから、しばしばスタジオにお邪魔するようになり、その後もいろいろと音楽的なサポートをしていただきました。そして、倉橋さんや自分の友達にその曲を聴いてもらったところ、これまた反応がよくて、オーディションに応募してみようかな、という気が起こってきました。

それでも、腰が重い私はしばらく何も行動に移せずにいたのですが、25歳の誕生日を目前に控えた7月のある日、「そろそろヤバイ、このままじゃあかん。」と思って、勇気を出してオーディション雑誌を買ってきました。その中でいくつかレコード会社を選び、手作りの歌詞カードを書き、デモテープを作りました。勢い込んで履歴書(図1)を書きました。大きい声で読んでみます…。

このときに名前を考えました。それまでの駄目な自分を変えたいという思いがどこかにありました。せっかく付けるなら名前から曲のイメージが広がるようなきれいな名前にしよう、そう思って付けたのがこの、

「入日 茜」という名前です。

できあがったのが誕生日の2日前、7月23日でした。1歳でも若い方が得だと思って、急いでポストに投函しました。パンパンと手を合わせて祈りました。ですが、不思議と「絶対誰かが気に入ってくれる。」と思っていました。倉橋さんも朝倉さんも、友達もみんな、あの曲を好きになってくれたし、入日茜というすてきな名前もできた、「絶対なんとかなる。」と思っていました。

時は8月となり、暑い奈良の夏がやって来ました。お盆が過ぎ、夏の風物詩、奈良の燈花会が終わったころのことでした。いつものように地ビール屋さんのアルバイトに行こうとして、玄関で、まさに靴を履こうとしていたとき、部屋の電話が鳴りました。急いでいたので、このまま行こうかとも思ったのですが、部屋に戻って電話をとりました。

「もしもし、入日茜さんのお宅でしょうか。」

「……はい。」

…ほんまにかかってきました。

応募した先のプロデューサーの方が直接かけてきて下さって、「デモテープを聴きました。とても良かったです。」というようなことを言って下さったと思うのですが、舞い上がっていたのと、バイトに遅れるといけないと焦っていて、とりあえず、「すみません、また後でかけます。」と言って電話を切りました。その日はさすがに仕事が手につかなかったですね。

改めて夜に電話をしました。「一度レコーディングをしに東京に出てきませんか。」と言っていただき、

それまでに、他の曲があれば聴かせてほしいということだったので、急いで朝倉さんに頼んでデモを取らせてもらって、9月に2日間、東京に行ってきました。

「株式会社グッデイ」、私が所属することになるその音楽事務所兼レコーディングスタジオは、東京都港区赤坂、テレビ局のTBSが近くにあり、外人のモデルさんが颯爽と歩いていたりする都会の真ん中にありました。そして、電話をかけてきてくれたプロデューサーと初めて対面しました。

時乗浩一郎さん。珍しい名前でも最初電話がかかってきたときに何度も聞き直してしまい、急いで電話は切るし、失礼な奴だなどと思われていないかなあと心配していたのですが、そのとき彼は彼で、曲の印象からもの凄く暗い人が出たらどうしようとビビっていたそうです。プリプロルーム (pre-production room) でいろいろな話をして、「ここで一緒に音楽を作って行きませんか。」と言っていただき、一ヵ月後、奈良のワンルームを後にして、大都会東京に出て行くことになります。こうして時乗さんという心強い味方を得て、入日茜の音楽人生の扉が開かれました。

ここで、オーディション応募のきっかけとなった曲、「水色の街」というタイトルだったのですが、今は歌詞が変わって新しく「哀しみのピアノフォルテ」という曲になりました。その曲と、旅立ちの歌である「白い部屋」を聴いていただきます。

♪「哀しみのピアノフォルテ」(歌詞等³⁾)

♪「白い部屋」(歌詞等²⁾)

オーディションの志望動機	自分の中から溢れ出てくるものを正直に表現することと許される生き方、それがアーティストなら、それを最もストレートに伝えることができるのは音楽だ。私が生きていくには、ここしかない。	
好きな学科	別にない	尊敬する人 Mother
好きなスポーツ	ドッジボール	趣味 寄り道、みやげ物屋めぐり
好きな音楽	ブランク、アリス、ビートルズ	特技 夜更かし、道路地図を見る
好きな色・ファッション	夕焼け色・シャツ	好きな言葉 ありがとう
好きなテレビ・映画	NHKニュース・ハスラー、酔拳	好きな本・音楽 太宰治作品・純度の高い音楽
自己PR	「甘く、激しく、」孤独だから美しい」「ただ、素直でいたたいけ」 —— そんな、入日茜の心の世界に触れた人が、この世の、その人自身の持っている、「独特な部分」を感じながら生きていくくれたら、とても嬉しいです。	

図1 オーディションに提出した履歴書(部分)

Figure 1. A part of the curriculum vitae of Ms. Akane Irihi, as presented to a recording company in Tokyo in July 2000, as part of her application of an audition for recording with a composition.

いよいよ、東京での生活が始まりました。事務所の仕事を手伝いながら、忙しい毎日を送っていました。そして、12月に、渋谷での初ライブが決まります。

私たちの間では対バンライブといって何組かのバンドが出演するのが通常なのですが、そのうちの一人として30分のステージをすることになりました。それから毎日必死で練習をしました。迎えた当日は、誰も私のことを知らないという状況の中、これ以上ない緊張をしてひとりキーボードでの弾き語りをしました。ただただ、一所懸命歌った、そんなライブでした。

それから、少しずつライブを重ねていくことになるのですが、最初の頃は、客席に3、4人しかいなかった、ということも多くありました。それでも、赤坂にあったLOVEというライブハウスのマネージャーの方が、私の音楽性に興味を持ってくれて、月一回、定期的にライブをさせてくれました。牧野康子さん。今も変わらず入日茜を応援して下さいます。

こうしてライブを重ねていくうちに、お客さんも少しずつ増えていって、一緒に演奏してくれる仲間もでき、2年後にはワンマンライブができるようになりました(図2)。南青山マンダラという著名なアーティストも出演している老舗のライブハウスで、いつか、ここで、ワンマンライブができたかと憧れていました。本当に多くの人の協力を得て実現したライブでした。

こうして上京して何年かが経ち、ライブ活動が軌道に乗ってきた頃から、なぜか曲が書けなくなってきました。メロディはピアノを触っているうちに出てくるのですが、歌詞が書けなくなりました。歌いたいテーマは、あの履歴書を書いた頃から何も変わらなかったし、人間のドラマをより深く描きたいという思いは強くなっていました。しかし、周りのスタッフや、お客さんの意見を聞いているうちに、最初は自分が歌いたいと思うものを作っていたはずが、いつの間にか、誰かが望むことばかりを意識して、どうやって書けばいいかわからなくなっている自分がいました。そんなときに、時乗さんにこんなアドバイスをいただきました。

「自分が何を歌いたいのか、何を伝えたいのかということ、きちんと持っていることはもちろん大切だ。それが、入日茜の世界観を作っている。だが、それだけではだめだ。いくら自分が何か伝えたいと思っても、それが聴く人に届かなければ、ひとりよがりな意味がない。

音楽を聴いて下さる人に必要とされて初めて、君は存在できるのだよ。伝えたいことが聴く人にどう伝わるのか、その人がどう感じるのかを意識して創りなさい。それを忘れてはいけないよ。」

そう言われて、改めて、シンガーソングライターという仕事について考えました。

自分が何を作りたいのか、それだけを求めるなら、それはエゴの押し付けと何も変わらない。かといって、周りの求めることだけを意識して作るのでは、自分の伝えたいこととズレていってしまうこともある。そのバランスの中で、いかに自分のオリジナリティを創り出すか、これは思っていた以上に、大変なことかもしれないと思う一方で、シンガー・ソングライターとは、やりがいのある仕事だなと、もう一度やる気が出てきました。

そうやって、何度か壁にぶち当たりながら、ライブを重ねていったのですが、同時に、いろいろなことにチャレンジしていきました。

同じ事務所の先輩、DEENという男性バンドのコーラスとして全国ツアーに参加させていただきました。北は北海道から、南は九州鹿児島までたくさんの土地に行きました。歌うだけではなく、なんと踊ったりもしました。よくやれたなと自分でも思います。DEENのアルバム「pray」の中に、私の曲を使ってもらいました。歌詞はボーカリスト池森秀一さんの手によるもので、環境破壊という深いテーマを持つ曲「Tears on Earth」です。

つづいては、「ドルフィンスイム」というショートムービーの音楽監督をし、映画のサウンドトラック³⁾を初めて書きました。テーマソングも歌わせていただいて、大学のときからの夢がひとつ叶い、嬉しかったです。伊豆諸島にある御蔵島というイルカの棲む島で、ロケに参加させていただきました。

それでは、東京へ出てから知り合ったミュージシャンたちを紹介しましょう。ギターの岩田裕樹さん…ポール・サイモンを師と仰ぐ、今どき珍しい正統派フォークギタリストです。お人柄の通りあたたかい音色を奏でます。チェロの森田香織さん…音色はもちろんのこと、演奏されている姿が本当に美しい、憧れの女性です。フルートの阿部飛鳥さん…彼女は実は大学の同級生で、3年前に大阪で運命的な再会をしてから、一緒にライブをするようになり、今ではお笑いコンビと呼ばれています。そして東京での一番の親友でもあります。パーカッションの福長雅夫さん…ドラム兼パーカッションで、最近ではメジャーなアーティストのサポートを色々とされており、ミュージックフェアなどの音楽番組にもよく出演されています。

このようにいろいろな人と出会う中で、またひとり、私に大きな影響を与えてくれた人との出会いがありました。写真家のハービー・山口さんです(図3)。彼はもう50代後半でいらっしゃいますが、好奇心旺盛で、



図2 初めてのワンマンライブ「夕焼けシネマ」
ライブハウス 南青山 MANDALA にて

Figure 2. Photograph of the first solo live performance 'Yuu-yake Shinema (Cinema in Evening Glow)' by Ms. Akane Irihi (person playing the piano at the center in Photo.) on 25 January 2003, in a live-music club 'Minami Aoyama MANDALA'.



図3 ハービー・山口氏との出会い、中央はファーストアルバム「魂のうた」³⁾
(フジテレビ Bs-i 放送「music tide」収録時にて)

Figure 3. Photograph of friendly meeting between Ms. Akane Irihi (right person in Photo.) and Mr. Herbie Yamaguchi (left person) a photographer in his working office on 6 July 2005, after the performance of a Bs-i broadcast program 'music tide', produced by Fuji Television Co., Ltd.

彼がいるといつの間にか周りにいる人がみんな不思議と友達になってしまいます。笑顔の配達人のようなすてきなおじ様です。彼はいつもこう仰っています。

「僕は見る人の心を清らかにする写真を撮りたい。夢とか希望を見失いがちなこの世の中で、もう一度人間を信じてみようと思わせる、そんな写真が撮りたいんだ。」

私はいつもハービーさんの作品たちに、そこに写っている人の過去や現在・未来を感じます。流れている時間の中で一瞬を切り取って、そこに被写体の人生を浮かび上がらせる、それが写真家という職業だとしたら、誰かの人生の一場面を描いている歌というものに、とても似ているなと思いました。彼はご自身の写真展でよくレクチャーをされているそうなのですが、日本の若者たちの笑顔を集めた「PEACE」という写真集⁹⁾のスライドを流しながら、私の曲をかけて下さっているということを聞きました。

「レクイエムが聴こえる」という、私の曲の中で1、2位を争うほど暗い歌なのですが、本当に笑顔の写真たちと合うのでしょうか？ 入日茜の感性と、ハービーさんの感性が、どんな風に共鳴し合うのか、今日はそれを実際に歌いながら皆さんに感じていただけたらと思います。

♪「レクイエムが聴こえる」(歌詞等⁹⁾)

こうして、上京してから4年の歳月が経ち、初めてのアルバムを制作することになりました。レコーディングエンジニアの稲垣祥一郎さん、アレンジをしてくれた時乗さん、表には出ない方たちですが、彼らのような人たちのおかげで、アーティストは自分の作品を形にすることができます。それまでもピアノの弾き語りのCDは出していたのですが、このアルバムでは、たくさんのミュージシャンの方たちが私の作品に魂を注ぎ込んでくれました。このアルバムのレコーディングを経験して、発見したことが二つあります。

ひとつは、共演してくれたミュージシャン、エンジニア、プロデューサー、みんな、それぞれが、その分野でのプロフェッショナルであり、そのひとりひとりの才能や感性が入ることによって、作品はより良いものになるという確信を持たれたことです。一緒に仕事をする関係で、お互いに Respect=尊敬し合える関係であることは、どんな仕事でも大切なことだと思います。そのために自分自身をいつも磨いていなければいけないと思うようになりました。

そして、もうひとつ。レコーディングとは Record=つまり記録するということです。これはまさに、その

ときの自分、その時代を閉じ込めて真空パックすることに他なりません。このアルバムを出して2年が経ちましたが、もっと、あそこを、こうしておけばよかったとか、今ならもっとうまく演奏できるのに、という部分があくつもあります。しかし、それで構わないと思うのです。そのときの私ができる、精いっぱいのことをやって、それを、自分の作品として世に問うことが大切なのであり、それが、形として残るといふことに意味があるのだと思います。

こうして出来上がったのが、ファーストアルバム、「魂のうた」⁹⁾(図3)です。

いろいろと話をして参りましたが、最後に学生の皆さんにメッセージがあります。

はじめに、オリジナリティを創るのは特別な才能ではない、その人の「感性」そのものだという話をしました。でも、それを内に秘めているだけではもったいない。いろんな人に出会って、どんどん自分の感性を磨いていってほしいと思います。

大学時代は自由な時間がたくさんあります。お金をかけない旅でいい、知らない街を旅して下さい。傷ついてもいいです、良い恋愛をたくさんして下さい。それから、一冊の本や、一本の映画、音楽、美術、そういったものからたくさんの感動と痛みを味わって下さい。他人の感性に触れる中で、自分はどういうことに喜びを感じるのか、どんなことに心惹かれるのか、それがだんだんはっきりと見えてくるようになります。そしてそれが、将来の仕事につながったり、同じ感性を持った人との出会いをもたらしてくれたりします。

オリジナリティは、これから社会に出ていく上で、とても頼りになる武器となります。皆さんひとりひとりが、すでにそれを創り出す感性を持っています。周りに流されず、どうか自信を持って未知の世界へ飛び込んで行ってほしいと思います。

私は来週から次のアルバムの制作準備に入ります。音楽の道へのきっかけを作ってくれた人たちや、応援して下さいファンの方たち、尊敬できる仲間たちとの出会いに感謝しながら、皆さんの心に届く、入日茜らしい作品を作りたいと思っています。皆さんの許にお届けできるのは春頃になるかと思いますが、そのときはぜひ聴いて下さい。

今日の講演をするに当たって、村上先生には大変ご尽力いただきました。自分ひとりではここまでまとめる事はできなかったと思います。音楽的な面でのプロデューサーは時乗さんですが、トークや執筆の方面ではこれからは村上先生がプロデューサーです。ぜひ今

後もご指導の程よろしくお願い致します。

それでは最後にこれから夢に向かって羽ばたいていく皆さんへの私なりの応援歌を歌って、今日の講演を終えたいと思います。

長い時間、ご静聴ありがとうございました。

♪「僕のヒーロー」(歌詞等³⁾)

3. 講演を終えて

講演は本学三翠小ホールで平成 18 年 12 月 12 日に行い、東京、神奈川、長野、愛知、福井など遠来の学外来訪者も聴講し、ピアノを持ち込み、既存の音響設備で実施した。それでも入日の歌唱は山田副学長から「弘法筆を選ばず。」スピーチも「言葉を紡ぐ。」と評していただき、学生からも「履歴書のインパクトに凄さを感じる。」「柔らかな声の中に力強さを感じる。」との感想が寄せられた。

会場ではあかね色の背景に象徴的な場面の映像をプレゼンテーションし、音楽とスピーチを一体化させて学生たちにさまざまなメッセージの投げかけを試みたが、意外にも、「大人」であるはずの教職員も日常を見直してみなければと感じていただいたようである。

研究に携わるものに置き換えれば、聴衆を考えた作詞作曲は読者本位の論文を書くことに、また、アルバムを作ることはその時代の研究成果をまとめた形で公表することに他ならない。共演者の方々やスタッフ

とのつながりも、共同研究プロジェクトを彷彿させるものであった。その一解釈を図 4 に示す。創造的活動とは音楽であれ、学術であれ、おそらくは企業であっても意外に類似点が多いのであろう。

新しい形態の講演会として、読者諸兄のご参考になれば幸いである。

謝 辞

当講演会は、本学共通教育センター行事として実施し、同センター委員 山田康彦副学長、荒井茂夫教授、鶴岡信治教授、高山進教授のご指導ご支援を賜り、同センター運営会議委員 松村直人教授には採択への支援ならびに本稿の校閲をいただきました。

教育学部 兼重直文教授にはピアノ借用を快諾いただき、準備および当日の運営に際しては、学務部教務チーム 樋口雅夫サブリーダー、家田勝也チーフ、杉本しく子チーフ、早川典子チーフ、服部美智代事務補佐員、学術情報部研究支援チーム 奥野照彦チーフ、総務部広報チーム 高倉美佐子チーフ、井上真理子事務補佐員、生物資源学研究科 今井邦雄教授、佐藤邦夫教授、奥村克純教授、成岡市教授、酒井俊典教授、名田和義助教授、森尾吉成助教授、野呂明美技術職員、学生諸君ならびに榎岩田楽器店 吉永有介常務取締役、三重大学生活協同組合 岡本一郎専務理事のご支援をいただきました。予行は本学東京オフィスで行い、学術情報部社会連携チーム 橋本城次リーダー、平田豊子

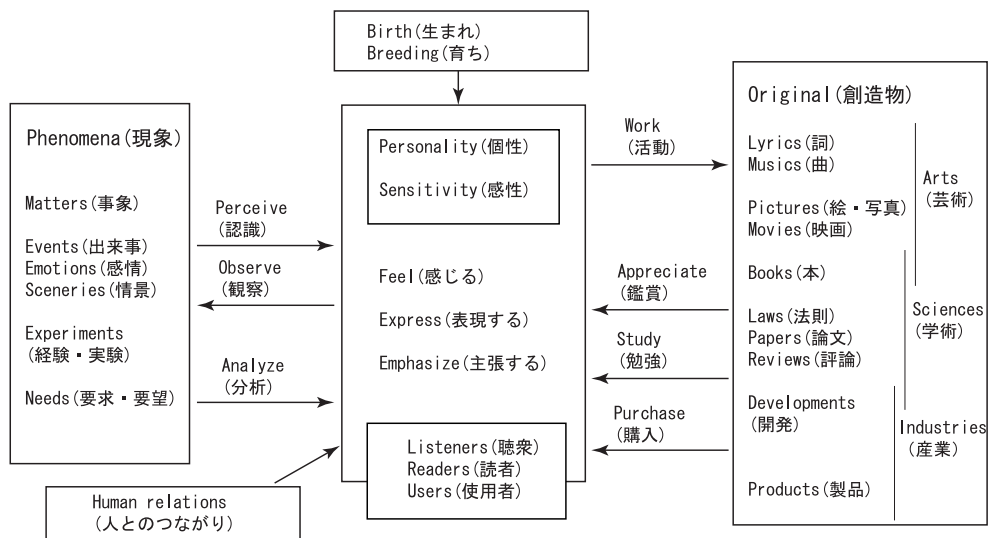


図 4 創造的活動に関する一解釈

Figure 4. Our interpretation of creative process.

チーフ、(株)コロボ産学官 工藤真紀子氏のご協力をいただきました。(御所属、御職名は講演当時とさせていただきます。)

内容に関する助言を音楽プロデューサー 時乗浩一郎氏に、英文作成の助言を教育センター新金岡 宮地謙一博士に、映像資料は写真家 ハービー・山口氏にご協力をいただきました。

本稿の出版に際しては、現・共通教育センター委員 野村由司彦副学長、中村哲夫教授のご支援をいただきました。

ここに御芳名を記し深く感謝の意を表します。

文 献

- 1) ジョー横溝, Borderless people, 東邦メディアプランニング, 東京, http://www.borderlessaudio.net/podcast/irihiakane200612_3.mp3 2006.
- 2) 入日茜, Cocktail 入日茜, Bellwood Records, 2002.
- 3) 入日茜, 魂のうた, Musicweb Records, 2004.
- 4) ハービー・山口, PEACE, アップリンク & 河出書房新社, 東京, 92pp, 2003.
- 5) 大木彩乃・信保陽子・入日茜・奥華子・浜崎奈津子・木村綾子, Cocktail II, Bellwood Records, 2003.

Talk on Human Lives, Works and Relationships Based on My Experience with a Musical Creativity

Akane Irihi* and Katsusuke Murakami**

Abstract

The significance of individual originality in the activities of human life was reported from the perspective of a singer-songwriter by Ms. Akane Irihi in a special lecture on 12 December 2006, at the Common Education Center, Mie University. The 'musical' lessons that she received at Nara Education University encouraged her to become a musician and singer-songwriter. Thereafter she successfully auditioned her composition at a recording company in Tokyo. Numerous experiences in human co-relations (i.e. co-musicians, staffs and fans) helped her, to grow as a better musician. Through performances of her art (live performances, recordings and compositions of music) and life experiences over about 10 years, she found that originality in the activities of human life, including art, investigation and so on, is extremely important, and that originality is created by the unique sensitivities of each person, which are the result of human relations with other persons, appreciation of arts, book readings, travels and so on. It seems that young persons should be encouraged to grow the good sensitivities in their lives, thanking people for supporting them, in order to promote better dreams and happiness for their lives and works in the future.

*Singer-songwriter

**Graduate School of Bioresources, Mie University

Corresponding author Katsusuke Murakami; murakami@bio.mie-u.ac.jp

Key words

Lecture, Singer-songwriter, Originality, Acquaintance, Human relations